

説教題：「**神の愛は生まれる前から**」

聖書箇所：エレミヤ書1章4-10節（1172頁）、ガラテヤ書1章11-17節（342頁）

説教者：秀島行雄牧師 招詞：讚美歌93-1-52 交読詩編：詩編119編25-32節（132頁）

讚美歌：83/11（感謝にみちて）/547（生まれる前から）/561（平和を求めて）/27

「今週の聖句」〔「わたしはあなたを母の胎内に造る前から／あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に／わたしはあなたを聖別し…」（エレミヤ書1：5）

「牧師室の窓」 「平和への願い色あせ令和の世自己中心の自己主張の世に」

「平和へと神の愛受け生きる世にこの生涯も一助になれば」

(1)皆様おはようございます。本日は8月の半ばを経過しました。この日本では8月は特別な月があります。仏教の風習として、お盆・盂蘭盆会(うらぼんえ)祖先の霊・亡くなった方々の霊を家に迎え入れて共にして過ごします。きゅうりを馬に見立てて迎え火を焚いて迎え入れ、なすを牛に見立てて送り火を燈してお見送りをします。毎年8月16日は京都五山の送り火が夜空を照らします。お盆を行なうこと理由の一つは平和を願うことにあると思います。

日本では8月は、アジア太平洋戦争での悲惨な状況を振り返り、戦争の犠牲者を弔い、平和への誓いを新たに重要な月間でもあります。先の戦争が終結して80年が経過し、如何にして平和を求め、築き、維持するのかを実践して行かなければなりません。本日は平和について、聖書の中の人物たちがどの様に考え、生きようとしてきたのかを、考えて参りたいと思います。

(2)まずは旧約聖書のエレミヤ書を見てみましょう。旧約聖書は全部で39の文書があり、3つ部門に分類されます。律法・預言者・諸書(様々な書物と言う意味です)に分類されています。預言者には、イザヤ、エレミヤ、エゼキエルの3大預言者と、ホセア、ヨエル、アモスなどの12小預言者とに区分されています。

私たちの南板橋教会では毎月1回の主日礼拝では「交わり礼拝」で旧約聖書を創世記第1章から毎月1章ずつ学び、285章(単純計算で約26年)にまで至り、来月はサムエル記下第19章を学びます。約3千年前に築かれたダビデ王国はソロモンに引き継がれますが、後に南ユダ王国と北イスラエル王国に分裂します。北イスラエル王国は約2百年間存続し、紀元前722年にメソポタミアに建国されたアッシリア帝国によって滅亡します。

一方、南ユダ王国は厳しい国際状況、武力の強い国からの攻撃を受け、無理難題を突き付けながらも、かろうじて持ちこたえ続けていました。紀元前630年頃にエレミヤが活動を始めたのです。歴史上の結論を先に言えば、エレミヤが活動してから約40数年後に南ユダ王国はバビロニア帝国によって滅ぼされてしまいます。滅亡の10年前に第1次バビロン捕囚があり、滅亡時には第2次バビロン捕囚として、南ユダ王国の多くの人たちは約1千km離れた土地に連れて行かれました。約50年もの歳月を異国で暮らすことになりました。出エジプト記による荒れ野での流浪の生活が40年続いたと書かれていますが、その荒れ野の40年を超える50年がバビロン捕囚となったわけです。皆様も物事を年数で考える場合には、10年単位や50年単位で考えると宜しいと思います。とは言うものの人生はなるようにしかならないと考えるのか、神の言葉を大切に人生を生きるのかによって大きく異なって来るのではないのでしょうか。私事ですが、洗礼を受けて52年、就職して52年の間に様々なことに出会いました。教会の主日礼拝で牧師が取り次ぐ聖書の言葉を只管にメモして通勤電車の中で記憶し暗記してきました。塵も積もれば山となる。これは本当ですね。50年間のバビロン捕囚の中で、生きる希望として、詩編が考案され、バビロン捕囚後に再建された神殿での拝礼で詩編が読まれていきました。

(3) 南ユダ王国の歴史をサラッとお伝えしましたところで、本日の聖書箇所エレミヤ書の1章1節～3節を読んでみますのでお聞き下さい。〔(エレミヤ書1:1)エレミヤの言葉。彼はベニヤミンの地のアナトトの祭司ヒルキヤの子であった。(1:2)主の言葉が彼に臨んだのは、ユダの王、アモンの子ヨシヤの時代、その治世の第十三年のことであり、(1:3)更にユダの王、ヨシヤの子ヨヤキムの時代にも臨み、ユダの王、ヨシヤの子ゼデキヤの治世の第十一年の終わり、すなわち、その年の五月に、エルサレムの住民が捕囚となるまで続いた。〕短い言葉が並び歯切れがよいですね。文字文学と言うよりは、口伝による伝承文学の様です。日本の「平家物語」の様に言葉が流れ出ているように聞こえてきます。「ベニヤミンの地のアナトト」とは、エルサレムの北東約4kmの場所です。エレミヤは「祭司ヒルキヤの子」と書かれているので、幼い頃から祭司の職業生活に馴染んでいたものと思われます。2節にある「主の言葉が彼に臨んだ」とは、神の言葉を人々に伝えなさい、預言者として行動しなさい、との呼びかけが断続的に続きました。エレミヤは、自分自身がその任務に向いていないと思い込んで預言者となることに消極的でありました。併し、神には人間の理解を遥かに超える判断基準があるのです。

…このことは現代社会に生きる若者を含む私たちもよく考えて理解を深めるべきであると思えます。例えば、学校を卒業して就職する若者は、転居を伴う転勤を望まない、嫌う傾向があるとの調査報告があります。或いは、仕事の職種につて、自分の希望する職務でないと思きたくないと思う調査報告があります。高校や大学を卒業する20歳前後の年齢で人生経験も職業経験も多いとは言えない状態の中で、自分の知らない広い世界での人生を拒絶するほどの判断をしてしまって良いのでしょうか。思いもよらない場所と空間と状況の中で人間は鍛えられ人生経験を重ねて行くのです。

…私たちが聖書を読むと言うのは、聖書の中に身を置いて、神の言葉を聴き、自分の現状との距離感を測る、測定しつつ神の言葉を理解することにあります。その一例がエレミヤ書の1章であり、新約聖書で受胎告知を受けたマリアの心の思いであります。

(4) 続いて4節5節を見てみましょう。〔(1:4)主の言葉がわたしに臨んだ。(1:5)「わたしはあなたを母の胎内に造る前から／あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に／わたしはあなたを聖別し／諸国民の預言者として立てた。」〕ここには驚くべき言葉が書かれています。その人に焦点が当てられています。神はその人を「母の胎内に造る前から／あなたを知っていた」、「母の胎から生まれる前に／わたしはあなたを聖別し」と言っているのです。サウルやダビデが目鼻立ちの良さ、外見の良さ、家柄の良さ、経済的に裕福であること等々によって、主の目に留まり選ばれたのと全く異なっています。なおかつ、この聖書の言葉にはもう一つの不思議さが加えられています。それは、「母の胎内に造る前から／あなたを知っていた」と言う神の言葉が、今を生きているその人に直接に話しかけられて伝えられているのです。誰かを介しての間接的な伝言ではないのです。この様に「母の胎内に造る前から／あなたを知っていた」、「母の胎から生まれる前に／わたしはあなたを聖別し」と言う考え方は何処から来たのでしょうか。私の記憶ではございません。この考え方は、主なる神と一人の人間との間に直接の対話・話かけがあることを示しています。2千5・6百年前にこのような考え方があったとは、驚くべきことですね。今日のこの聖句を現代に生きる私たち一人一人が大切に生きて行かねばなりません。特に、思春期や青年期にあって悩んでいる若者にも、老齢期にあって寂しい思いをしている人たちに、壮年期に人知れず悩んでいる人には、どの様なお薬よりも効果があると思えます。でも、このことをお話ししても、科学的ではない、何と馬鹿々々しいことだと一笑に付されてしまうことでしょう。電車に乗って周りを見回してみると、椅子の腰を掛けている人も立っている人も、その殆どがスマートフォンの画像を見えています。吸い込まれているようです。この様な時代ですから尚更、キリスト教の教会

は、スマートフォンに吸い込まれている様なこの社会の人々に対して、「母の胎内に造る前から／あなたを知っていた」、「母の胎から生まれる前に／わたしはあなたを聖別し」たと伝えることが求められていると思っています。日本基督教団も東京教区も今やらねばならぬことの本優先課題だと私は思います。スマホを活用しても良いのです。財政的に困難であれば困難を突破する様に考えれば道は開けてくるのです。

8節には〔(1:8)彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて必ず救い出す〕と主は言われた。〕と書かれています。立ちすくまずに、一步を歩みなさいと主は語り掛けています。

(5) きのうのもう一つの聖書箇所はガラテヤ書に書かれているパウロの言葉です。パウロの時代のキリスト教は、ユダヤ教の一部であると看做されていました。従って、パウロが異邦人伝道を行なっても、ユダヤ教の考え方を重視する伝道者が入り込んできて、十字架のイエス・キリストによる救いがユダヤ教の律法を重視する考え方に振り戻されていたのです。パウロは十字架の救いを体験し、あんなにも熱心であったユダヤ教と決別して、キリストの福音を伝えることに人生を費やしました。その人生の再出発を始めたことの心意気・心情が今日の聖書箇所ガラテヤ書1章15節に記されています。〔(1:15)しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに〕と書かれています。パウロにはエレミヤ書に書かれているあの言葉が心の中に響いてきたのです。聖書の言葉に触れて繰り返し反復して言葉に出すことは大切です。その御言葉が私たちの人生の道しるべとなり、新しい人生へと導いてくれることになるからです。パウロは異邦人伝道に生涯を捧げ、その恩恵が2千年の時を隔ててこの南板橋教会の私たちにも告げ知らせている、驚くべき事実があるのです。

(6) 最後に追加です。8月の第1主日は日本基督教団の行事暦「平和聖日」です。先週の15日は終戦の日でありました。鹿児島県の南九州市に知覧(チラン)と言う地名の場所があります。お茶の生産量が日本一として知られています。私の父親は鹿児島市内で生まれたので鹿児島は私にも馴染みがあります。先の戦争の末期に特別攻撃機がこの知覧飛行場からも飛び立ちました。旧式の飛行機に重たい爆弾を抱えさせてアメリカ軍の軍艦や航空母艦に体当たりをさせる自殺攻撃です。旧式飛行機ですからその殆どが撃ち落されてしまいます。命令した指揮官の何と愚かな考えだったことでしょう。職業軍人とは思えぬ判断力でした。職業人とは、事柄を予測し、判断し、事柄の結果について責任を持つ立場の人であります。乃木希典や児玉源太郎の判断力は日本の職業軍人には引き継がれることはなかった、まことに口惜しいことです。

戦争が終わり、ある老夫婦が知覧飛行場の跡地を訪ねて、敷地内にある小さな石を手にとってハンカチに包みました。万葉学者の犬養孝先生から教えられたお話です。老夫婦は息子が生きている時に踏んだ石かも知れないと大切に持っていたのです。話変わって、万葉集は全部で20巻あり4516首が納められています。14巻目にある通し番号では3400番は「相聞歌(恋の歌)」です。長野県の千曲川の川岸で若い女性が小さな石を目に留めました。愛しいあの人が踏んだ小石かも知れないと、宝石のように思って拾ったのです。「信濃なる千曲(ちぐま)の川の小石(さざれし)も君し踏みてば玉と拾はむ」万葉集としては方言が入り素朴な歌です。私は万葉集を学生の時に学び、理不尽にも処刑される悲しい歌を数多く接してきました。知覧飛行場の小さな石のこともその時に教えられました。次の世代に、命の大切さ、戦争の無残さ、平和を築き上げることの大切さを伝えて参りたいと思っています。

・・・お祈りします。

イエス・キリストの主なる神様。私たちは、平和聖日の8月を迎えています。長い年月が戦争のために費やされアジア・太平洋各地が戦場となり、現地の人々の、日本人の夥しい人命が失われま

した。日本の国内も戦場となり、戦災により、原子爆弾により、多くの命が絶たれました。その戦争終結から80年を経た今日、地球の各地で戦争が起きており、悲しい状況が続いています。神が創造されましたこの地球上に生きる一人一人に平安・平和と希望が与えられますように。食べ物が乏しい人々に、災害や戦争の只中にある一人一人に慰めがありますように、お守りください。私たちに知恵と勇気をお与え下さい。

教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している、働いている一人ひとりに、主なる神の御恵みと平安がありますように。

イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン